大正・昭和戦前期における地方建築技術者の建築活動

三重県における野田新作の建築活動

正 会 員 菅 原 洋 —*

はじめに

本稿は地方における近代建築技術・意匠の定着・展開過程を解明するための礎として、特定地方に定着して建築活動を行なった個別技術者に着目し、その建築活動を跡付ける中で、地方建築技術者の実態と役割を考察する事を目的としている。

ここで考察の対象とする大正・昭和戦前期は明治30年代以降に各地に整備された工業学校出身の中堅技術者が大工棟梁に代わって地域的建築活動の中核となった時期である。殊にここで考察する三重県にあってはこの時期に市井の建築を扱う自営建築技術者が出現を見る。一方その下限は戦後の戦災復興、学校建設などに基盤を得て建築活動が再び活発化のきざしを見せ、建築基準法、建築士法が施行される昭和20年代中葉以前と考える。従ってその時期はほぼ市街地建築物法の施行期に相当するものであり、ここでは若干の前後の時期を含んで考察する。

ここで取上げる野田新作は明治30年代に中堅技術者としての建築教育を受け、明治40年代以降は四日市市、陸軍、三重県、民間企業において各種の営繕活動に携わり、その後自営して建築活動を行っており、大正13年頃の設計事務所開設は三重県下では最も早期に属する。その建築活動はほぼ三重県内に限られ、大正・昭和戦前期に活動の最盛期を迎えている。野田の建築例は表一に示す通りであり、これらは棟札、設計書、工事写真、竣工式写真、議会議事録、新聞記事などによって野田の関与が確認できるものである。また、文字資料を欠くものの当該建物の設計事務、施工に直接関与した当時の事務所所員、施工担当者の証言が得られ、野田によるものとして差し支えないものはこれも併せて表に示した¹⁾。

ここに地方建築技術者の一例として野田を取上げる理由は、第一に野田が工業学校において建築教育を受けた最初期の建築技術者であり、こうした中等程度の建築教育を受けた建築技術者がこの時期の地方建築技術者の中核的存在であったと考えられる事²⁾、第二に、野田の開設する設計事務所は県下としては最初期に属するもので

あり、こうした市井の建築に携わる自営建築技術者の成立は、この時期の三重県内の建築の展開上無視できないものと考えられる事などであり、野田を通してこの時期の地方建築技術者の実態と役割の一端を解明できると考えられる事による。

以下、本稿では野田の建築活動を年代を追って検討し、ついでその作品のいくつかを取上げてその建築的特徴を検討し、最後に野田の建築技術者としての特質および自営技術者としての活動を可能にした条件を検討して、従来言及される事の少なかった地方建築技術者の実態と役割を考察する事を意図している。

1. 建築教育歴

野田新作は明治23年1月25日、山形県南置賜郡玉庭村（現東置賜郡川西町）で生まれた。野田姓は明治43年の三重県鈴鹿郡石薬師村（現鈴鹿市）の野田家との婿養子縁組によるもので、旧姓は貝沼であった。貝沼家は農林業を営む土地の素封家であり、野田は二男に当る³⁾。明治37年4月、野田は米沢市の山形県立工業学校に入学する。工業学校における中等程度の工業教育体制が本格的に整備されるのは明治32年の実業学校令制定を契機としており、野田はこれに基づいて建築技術者としての教育を受けた最初の世代と言ってよい。

山形県立工業学校は明治30年に米沢市立工業学校として開校し、翌年県立に移管されたもので、建築科は明治35年4月に木工科として設置され翌36年に建築科と改称されている⁴⁾。野田は建築科の3期生に当り、同期卒業者は16名であった⁵⁾。同科は本科3年で2年次から生徒を建築と指物の2コースに分けて教育を行っており、野田は建築コースを専修したものと推定される。当時の建築コースにおける専門科目は図画、材料論、材力学、規矩法、建築図、建築学、実習であり⁶⁾、その教育内容は木工技能教育を中心にするものと考えられている⁷⁾。建築科教職員は教諭3、助手1、模範職工1であり、教諭はいずれも東京高等工業学校附設工業教員養成所卒業の経歴を有している。また助手は同工業補習学校、模範職工は同職工徒弟学校を卒業している⁸⁾。

2. 組織技術者としての活動

2-1 四日市市及び陸軍

* 三重大学 助手・工修
(昭和62年11月10日原稿受理)

表—1 野田新作の関与した建築

No.	建物名称	建築年代	構造・階数	所在地	野田の役割・その他	資料(所蔵)
1	〈三重県在職中〉 三重県師範学校演武館	大正 5	W・1	津市	設計監督者 新作 請負国分市太郎	工事写真(貝沼家)
2	〈東洋紡績在職中〉 四郷村役場	大正 10	W・2	四日市市	設計技師大石清隆 現場技手中野康太郎 内訳書 野田用箋	模札(四日市市) 「役場庁舎新築設計図書」(四日市市)
3	〈野田工務所〉 松阪町役場	大正 15	W・2	松阪市	設計者野田工務所 受負人島谷市蔵	模札(松阪市)
4	鎮国守国神社社務所	昭和 2	W・1	桑名市	設計者野田工務所 工事受負水谷竹次郎	竣工式写真(鎮国守国神社)
5	伊藤伝七邸	昭和初	W・1	四日市市	設計*	担当所員
6	多度尋常高等小学校	昭和8~9	W・2	多度町	設計者野田新作 工事請負人石川庄平	「昭和八年村会書類綴」(多度町)
7	須藤鉄次郎倉庫	昭和 9	RC・2	四日市市	設計*	担当所員
8	桑島公百年記念宝物館	昭和 9	RC・2	桑名市	設計監督野田新作 施工伊藤主太郎	「桑城遺珠」(鎮国守国神社)
9	四郷尋常高等小学校講堂	昭和10	RC・2	四日市市	工事請負者野田新作 昭和61解体	昭和10.5某新聞(「四郷小学校百年」所収)
10	大矢知尋常高等小学校講堂	昭和10	W・1	四日市市	設計*	昭和60解体 担当所員
11	富州原競馬場	昭和12	RC/S	四日市市	設計*	昭和60解体 担当所員
12	平田製綱寄宿舍・事務所	昭和12	W・2	四日市市	設計*	昭和63解体 担当所員
13	千種尋常高等小学校講堂	昭和12	RC・2	孤野町	設計者野田新作 施工服部隆*	設計書他(孤野町郷土資料館)
14	東洋スチール尼崎工場	昭和13~15	S・1	尼崎市	設計*	担当所員
15	亀山製糸室山工場女工寄宿舍	昭和20年代前半	W・2	四日市市	設計	設計書(原図、野田家)
16	七取村役場	昭和20年代前半	W・2	多度町	設計	設計書(原図、野田家)
17	多度中学校	昭和24	W・1	多度町	設計 施工塚原組*	設計書(原図、野田家)
18	〈野田一級建築士事務所〉 宗村佐信邸増改築	昭和25~26	W・1	四日市市	設計*施工*	○ 工事担当者
19	吉田邸茶室	昭和26~27	W・1	四日市市	設計*施工*	○ 工事担当者
20	平田佐造邸	昭和20年代後半	W・1	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
21	林公衆浴場	昭和20年代後半	W・1	四日市市	設計のみ*	設計書(原図、野田家)
22	豊栄工業塩浜工場	昭和20年代後半	W・1	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
23	平田製綱			四日市市		
24	寄宿舍	昭和21~35	W・2		設計 施工* 約20棟	昭和63解体 設計書(原図、野田家)
25	厚生寮(葵)	昭和20年代	W・2		設計 施工*	昭和63解体 設計書(原図、野田家)
26	稲荷社	昭和27・8年頃	W・1		設計のみ*	昭和63解体 工事担当者
27	公衆便所	昭和27・8年頃	W・1		設計*施工*	昭和63解体 工事担当者
28	萬里工業	昭和25~35		四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
29	事務所		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
30	第一織機工場		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
31	第二織機工場		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
32	第三織機工場		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
33	絹付工場		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
34	倉庫		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
35	寄宿舍		W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
36	晩学園			四日市市		
37	幼稚園	昭和30	W・1		設計 施工*	○ 設計書(原図、野田家)
38	高校	昭和31	W・2		設計監督野田一級建築士事務所施工直営	○ 設計書(原図、野田家) 確認通知書(晩学園)
39	小学校	昭和31	W・2		設計監督野田一級建築士事務所施工直営	○ 設計書(原図、野田家) 確認通知書(晩学園)
40	中学校	昭和33	W・2		設計 施工*	○ 設計書(原図、野田家)
41	職員室	昭和33	W・1		設計 施工* 見積野田工務店	設計書(原図、野田家) 見積書(晩学園)
42	専用住宅	昭和34	W・1		設計監督野田一級建築士事務所 施工直営	設計書(原図、野田家) 確認通知書(晩学園)
43	平屋校舎棟	昭和30年代前半	W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
44	調理室棟	昭和30年代前半	W・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
45	野田新作邸	昭和30年	W/RC・2	四日市市	設計 施工*	○ 設計書(原図、野田家)
46	土上邸	昭和30年代前半	W・1	四日市市	設計*施工*	○ 工事担当者
47	生川平作邸	昭和34	W・2	四日市市	設計 施工*	○ 設計書(原図、野田家)
48	天理教亀山分教会設計	昭和34	W・1	亀山市	設計のみ*	○ 設計書(原図、野田家)
49	生川コンクリート第二工場	昭和35	W・1	川越町	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
50	佐野製作所	昭和36か		川越町	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
51	工場		RC・2		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
52	倉庫		S・1		設計 施工*	設計書(原図、野田家)
53	長深青年会館	昭和30年代	W・1	東員町	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
54	長戸邸	昭和30年代	W・1	四日市市	設計*施工*	工事担当者
55	野呂漁網住宅	昭和30年代	W・1	四日市市	設計*施工*	工事担当者
56	生川平作別邸	昭和30年代		名古屋	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
57	平田邸	昭和30年代	RC・2	四日市市	設計 施工*	○ 設計書(原図、野田家)
58	荒木邸	昭和30年代	W・1	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
59	富住候番	昭和30年代	W・2	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
60	山福旅館増築	昭和38	W・2	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
61	長深農協増築	昭和38	W・2	東員町	設計 施工*	設計書(原図、野田家)
62	島田邸	昭和38	W・1	四日市市	設計 施工*	設計書(原図、野田家)

注 建築年代は竣工又は工事期間を示す。
Wは木造、RCは鉄筋コンクリート造、Sは鉄骨造を表わす。
所在地は現在の名称による。
○は現存するもの

担当所員は我妻正俊氏(昭和6~16担当)、工事担当者は
小林信治氏(昭和24~38担当)を指す。
*は担当者の証言に基づく事を示す。

野田は明治40年3月27日山形県立工業学校を卒業し同年4月26日付で三重県四日市市雇となる⁹⁾。四日市は山形の貝沼家にとっては未知の土地であり、野田を四日市に誘った事情は明らかでない¹⁰⁾。一方、四日市市側の事情としては当時東海地方では中等程度の建築教育機関は皆無であったため、技術者を広く求める必要があったと推測される¹¹⁾。

野田は四日市市雇となって後、明治41年6月24日付で四日市市技手に任ぜられている。しかし明治43年12月1日から翌44年11月30日まで一年志願兵として陸軍名古屋工兵第三大隊に入営し、除隊後再度四日市市技手に任ぜられるが、大正元年10月2日には依頼解職となって四日市市を辞している。

野田の四日市市在職は延4年半と短期間であり、この間の活動としては第四尋常高等小学校及び第五尋常高等小学校の営繕工事に加わったと伝えるのみである¹²⁾。これらは教室、便所、渡り廊下の新設など比較的小規模な木造営繕工事であり¹³⁾、この他の事績は詳かでない。

野田は四日市市を辞職後の大正元年10月7日には陸軍第15師団経理部雇となり、翌2年2月17日付で第15師団経理部附の陸軍技手に任ぜられている。しかし早くも大正3年4月28日付で依頼免官しており、その活動期間は短い。第15師団における野田の職務内容是不詳である。

2-2 三重県

陸軍省を依頼免官の後、野田は大正3年5月2日付で三重県土木工手に任用され、内務部土木課勤務となっている。同課での勤務は大正8年6月24日までの約5年間に及び、この間大正7年12月24日付で三重県技手に任ぜられている。当時の建築活動を窺い得るものに野田旧蔵の写真類があり¹⁴⁾、このうち三重県師範学校演武館(No.1)工事写真の裏面には演武館の沿革と設計大要、平面図が記され「設計監督者 新作」と記名されて野田の担当になる事が明らかである。

2-3 東洋紡績

大正8年6月24日、野田は依頼解職により三重県を辞職している。一方、同年12月の「東洋紡績株式会社職員名簿」には富田工場営繕掛として野田の名が記され、三重県辞職後まもなく東洋紡績に入社している事が知られる¹⁵⁾。東洋紡績は四日市市の三重紡績と大阪市の大阪紡績の合併によって大正3年に誕生し、同6年には四日市市北郊の富州原村で富田工場を設立している。富田工場では同9年に紡績第一工場竣工、同12年紡績第二工場竣工、同14年紡績第三工場竣工と工場整備が進められていく¹⁶⁾。野田の東洋紡績入社はこのような時期に当たっており、富田工場では工場新増築に伴う事務所、寄宿舎、社員宿舎、工場など各種の施設の建設が相継いでいた。野田は同工場の営繕掛員(大正8年5名、9年3

名)の一人として、これら施設の営繕に関与したと推測されるがその詳細は不明である。なお工場施設の他には大正9年まで東洋紡績社長を務めた伊藤傳七が出身地に寄付した四日市市西郊の四郷村役場(No.2)の設計に関与している¹⁷⁾。但し同建物棟札には建築関係者として富田工場営繕掛筆頭の大石清隆が設計技師、末席の中野康太郎が現場技手と記され、野田の名は記されていない¹⁸⁾。大石が設計を統括する立場から設計技師として名を連ね、野田の記名が省略された事や、野田の役割が部分的なものであった事も考えられるが速断し難い。富田工場における建築活動は次に記すように大正13年頃まで及んだと考えられる。

このように野田の建築活動のうち明治40年代から大正13年頃にかけては組織に属する技術者としての活動であり、野田は四日市市、陸軍、三重県、東洋紡績に在籍している。大正・昭和戦前期の三重県内の建築技術者は三重県、各市、神宮司庁、造神宮使庁、大手紡績会社などに属するのが通例であり¹⁹⁾、野田はその主要なものに在籍の経験を持ったのであるが各組織での在籍期間はいずれも比較的短く、野田の役割も明確ではない。この時期、東海地方では明治38年創立の名古屋高等工業学校を除けば建築教育機関は未整備の状態にあり、各組織では技術者の確保をある程度の実務経験を有する中堅技術者の中途採用に求めている事が窺われる。技術者側からすれば待遇や職務内容、個人的事情などによって各組織を渡り歩き得るような状況にあったと言える。

3. 自営技術者としての活動

3-1 野田工務所

野田はその後、東洋紡績を退社して四日市市の自宅に野田工務所を開設する。その時期は明確ではないが大正13年度には野田工務所設計による松阪町役場の設計及監督費が計上されており²⁰⁾、また大正13年の『建築学会会員住所姓名録』の野田新作の欄には従来なかった「野田工務所」の記載があり²¹⁾、大正13年頃と見てよいであろう。なお、大正15年には野田工務所の重要な依頼主となる平田製網(のち平田紡績)に紡績部門が新設され、操業が始まっている。平田製網の紡績部門新設は従来同社向けの網糸用特殊綿糸を生産していた東洋紡績の勧めによるものであり²²⁾、野田工務所の設立自体も平田製網の紡績工場新設を契機とする可能性がある。この野田工務所が三重県における最初期の建築設計事務所となるのであり、これについては5で再論する。

野田工務所による建築のうち最も初期に属するものは大正15年7月竣工の松阪町役場(No.3)である。松阪町役場竣工後、日米開戦までの十数年間は野田自身も働き盛りの年齢であり、建築活動の最も充実した時期であった。この時期に野田が手懸けた建築は役場庁舎、学校、工場施設、神社、住宅など多岐に涉っている(表一

1)。

この時期に野田工務所の所員として確認できる建築技術者は所主の野田のほか、昭和5年から11年の間で延べ6名を数え、それぞれの在籍期間は明確ではないが昭和10年頃には4,5名の所員が在籍しており、所員構成の上でもこの頃を最盛期と見てよいようである²³⁾。野田工務所の主な活動は設計監理であるが、時には請負業務も行なう事があった。しかし、昭和5,6年頃に野田工務所の設計施工で行なった平田製網の工場施設建設では大幅な欠損を生じて経営危機に頻し、それ以降は請負業務は殆ど行なわれていない²⁴⁾。

この時期、野田工務所は野田の自宅に事務所を併設し、また平田製網構内にも出張所を設けていた。仕事の進め方は殆どの図面を野田が作成し、所員はトレース、付属屋の設計、現場監理などを担当したが鉄骨造や鉄筋コンクリート造の場合は所員が構造設計を担当した。野田の設計図の表現が緻密である事、現場監理の厳格な事には定評があったという。なお、この時期には野田工務所の名称が請負業を連想させ、設計事務所に相応しくないとする所員の発案で、昭和11年頃野田工務所の所名は野田建築事務所に變更されている²⁵⁾。しかし、その後も両者の名称が併用され、野田建築事務所の名称は一時的なものに留まる。この二つの所名の違いは明確でなく、本質的な差は認められないので以下では野田建築事務所としての活動も一括して野田工務所の活動として扱っていく。

昭和戦前期は野田工務所の建築活動が活発に行なわれた時期であるが、一方事務所経営はそれにも関わらず必ずしも安定したものとは言えない。先の請負業務の失敗はその一例であるが、次に示す書簡も事務所経営の内情と野田の設計態度をよく示すものである²⁶⁾。これは千種尋常高等小学校講堂(No.13)の設計に際して野田から千種村長に宛てたものであり昭和11年4月11日付の第一信には、「すべての研究点もすみ(中略)構造計算も出来る丈け最小限度とし経費の少なき様考へ置き候(中略)全体構造は申し分なき様にいたし候へ共工事の施行方法と経費の点は幾分の増加は免れがたき様存じられ候」と設計の進捗状況を述べている。続く4月30日付の第二信では設計が完了した事を述べ、ついで「何分四カ月もかかり候事とてとんと生活費に窮し候次第何卒本日は是非金四百円也御拝借相願上度」と窮状を訴え、工事施工に関しては「如何にせば安全に施工せらるるかに付熟考いたしたる結果矢張り(中略)経験と技術に熟達せるものを撰ぶ事肝要」として大手請負業者を勧めている²⁷⁾。更に5月23日付の第三信では設計書の一部訂正のため26日に千種村に出張する事を述べ、「猶其の節設計料残金貳百円也是非御渡し相願上度廿六日御都合あしくは何とか御都合被下三十日までには御願ひ申上候、当

方俸給の支拂の関係上三十一日では遅くなり過ぎ申すべく候」とあって野田工務所の経営はいわば自転車操業的な不安定な状態にあった事が窺われる。

野田工務所は以上のように設計監理を主な業務とするが時には請負業務も行なっており、請負業務は必ずしも成功したとは言えない。このほか工務所に製造専従者を置いて野田の考案によるコンクリート製門柱、柵、物干柱などの製造販売も行なっていた。これは副次的な活動でありどれほどの経営的效果があったか詳かでないが、不安定な事務所経営を補完するものであり、また請負の例とともに野田が事業家的側面を併せ持っていた事を示すものであろう。

野田工務所による戦前の建築活動は昭和12年竣工の千種尋常高等小学校講堂(No.13)を頂点として、その後次第に顕著な動きを見出し難くなり、所員も離散していく。昭和14,15年頃には平田製網が主体となって尼崎市に建設していた特殊鋼工場の設計監理が殆ど唯一の主要な業務となっていた²⁸⁾。その後、野田工務所は戦災を受けて事実上休業状態となり、昭和20年代初めまでは野田工務所の活動は平田製網の小規模な営繕工事を担当する程度に留まっている。

3-2 野田一級建築士事務所

戦後における建築活動は昭和20年代中葉から再び活発化していく。昭和20年代前半は従来からの野田工務所の所名を用いているが、野田が昭和26年に一級建築士資格を取得してからは²⁹⁾、所名を野田一級建築士事務所に変更し、これに野田工務店を併設している。事務所には野田のほか所員1名を置く程度であり³⁰⁾、戦前の最盛期に比べごく小規模になっている。戦後の野田の建築活動は殆どが設計・施工を一貫して行なうものであり、対外的にも野田工務店の名称が多用されている。

戦後の野田の建築活動は三群に大別される。第一は平田紡績(No.23~26)、亀山製絲(No.15)などの工場施設であり戦後比較的早い時期の建築はこの種の工場施設が多い。第二は多度中学校(No.17)、暁学園(No.34~41)の学校建築である。暁学園は従来から野田との関係の深い平田紡績関係者が主体になって設立した私立学校であり、野田は創立以来の各種建築を一手に手懸けている。第三は住宅を中心とする民間の小規模建築である。

戦後は野田も老齢となり、後継者を持たず事務所規模を縮小した事と相まって、戦後野田が手懸けた建築は以前から関わりのある建築主の依頼による比較的小規模な建築が大半を占め、公共建築は少ない。またその意匠も戦前以来の手慣れた手法による堅実さの目立つものが多い。野田の建築活動は昭和38年頃を最後に止絶え、野田は昭和41年8月29日死去する。享年76才であった。

4. 野田新作の建築作品

以上見てきたように野田が設計監理を行なった建築は

数多い(表—1)。次に野田の建築活動の最盛期である大正・昭和戦前期の作品について建築の意匠構成上、技術上の特質を示すものを幾つか取上げ、その意義を検討していく。

4-1 木造モルタル塗の作品

木造モルタル塗の作品は少なく、戦後のものを別とすれば確認し得るものに松阪町役場(No.3, 図—1)がある。松阪町役場は大正15年の竣工で木造モルタル塗2階建、背面左右に翼部を持つコの字型平面を有する。竣工時の写真によれば正面立面は左右対称で、左右翼部と玄関をわずかに突出させて切妻破風を立上げ、大屋根には半円形屋根窓を配する。玄関ポーチには弓形屋根を架ける。窓は上下階とも縦長の上下窓を密に配し、壁面には要所に水平、垂直にテコ・コックないしタイルを帯状に廻らす³¹⁾。工事関係者は棟札によって設計者野田工務所、請負人島谷市蔵、棟梁東谷仁助、同堀江政吉などが知られる³²⁾。野田の作品には同種の意匠を持つ木造モルタル塗のものは確認できないが、近隣には松阪町役場からの影響関係を窺わせる建築があり注目される。それは当時松阪町会議員であった森秀次郎が大正15年ないし昭和元年頃に創業した公衆浴場宝温泉(図—2)であり³³⁾、松阪町役場の棟梁であった東谷仁助の設計施工になる³⁴⁾。宝温泉は木造寄棟造2階建で外壁をモルタル塗仕上とし、屋根には松阪町役場とほぼ同形の半円形屋根窓を載せ、正面中央には松阪町役場に類似する玄関ポーチを設ける。なお、外壁は戦後修理され、この時窓回り(当初上下窓)は変更されている。松阪町役場では玄関ポーチ壁面には中央に卵型の壁面装飾を設けるが、宝温泉ではこの部分にモルタル仕上コテ細工で龍を作り出し、より大衆性を持った意匠となっている。

松阪町役場及び宝温泉に共通する屋根窓や玄関のモチーフは必ずしも特異なものではないが、松阪を初めとする三重県下では同種のモチーフを用いる建築の例は今の所確認できないものであり³⁵⁾、大工が共通し時期が接近している事を考えれば、宝温泉の外観意匠は松阪町役場の影響のもとに成立した事を窺わせる。このような影響関係が成立するとすればそれは近代建築技術・意匠が技術者から大工棟梁に移転し、大衆的な表現を得て地域に定着する過程の一つを例示するものと考えられる。

4-2 木造下見板張の作品

木造作品の殆どは戦後のものを含めて外壁を下見板張とし、付柱や窓枠などの縦横の要素で壁面を分節したものである。次にその例として多度尋常高等小学校(No.6, 図—3)を挙げる。これは昭和8年の竣工で、同規模の管理・教室棟、教室棟の2棟のうち管理・教室棟が昭和57年に移築・保存されている。内部に一部間仕切りの変更があるほかは竣工時の写真に照らしてもほぼ当初の形式を維持していると言える。この建物は木造2階建切妻造で、正面中央の玄関部分では大屋根に切妻破風を上げて正面を強調している。二階窓上にわずかに漆喰壁を残すほかは下見板張とし、窓枠を延長し隅部では柱型を見せて壁面を区切る。野田の場合、外壁を下見板張とする時も単純な大壁を扱いとはせず、窓枠や柱型などの水平・垂直の要素によって壁面を分節する方法が多用されており、戦後期に至っても個人住宅を除く木造建築では概ねこの手法が踏襲されている。

こうした手法は野田独自のものではなく例えば、野田にやや遅れて大正15年に三重県桑名町に設計事務所を開設した黒宮五朗(早大正3年卒)の設計による桑名第四尋常高等小学校(昭和8年竣工, 図—4)にも野田と同様の手法が見られる³⁶⁾。桑名第四尋常高等小学校では玄関ポーチの球形アーチ、左右翼部妻壁の楕円形アーチ欄間窓、幾何学的形態の柱型・柱頭飾などアル・ヌーヴォーないしセセッション的要素を部分的に採用して野田に比べ、より華やかな立面を指向している。しかし外壁面を下見板張とし、上下の窓と腰を垂直に組込んだ立面モチーフによって立面にリズムを与えるなど立面構成の骨子は多度尋常高等小学校(No.6)と共通する。

また、これに類するものは大正・昭和戦前期の三重県における学校・庁舎などの公共建築中にも比較的多く見出す事ができる。この時期の三重県内の公共建築は一部が鉄筋コンクリート造とされる他は概ね木造であり、それらの木造公共建築には、a) 外壁をモルタル塗とするもの、b) 外壁を下見板張とし、柱型や窓枠などの縦横の要素で壁面を分節するもの(多度・桑名第四尋常高等小学校はこの形式に属するものと考える)、c) 外壁を単純な下見板張の大壁とするもの、d) 外壁を土壁による真壁とするもの、の4形式が見られる。このうち a), d)

図—1 松阪町役場(絵葉書)

図—2 宝温泉

図—3 多度尋常高等小学校

の類例は少なく、殆どがb)ないしc)となるがc)がb)よりもやや類例数において優る³⁷⁾。c)の類例の殆どは単純な矩形平面の小規模建物であり、外観も玄関部分にポーチを設け、窓に額縁を廻らす程度の簡潔なものとなる。一方b)の類例はやや規模が大きく平面も複雑で、外観も左右端に翼部を突出させてシルエットを豊かにし、多少の装飾的細部を用いる場合が多く、c)に比べてより意匠性を配慮した事が窺われる。野田、黒宮、あるいは三重県営繕組織などの技術者による建築の殆どは確認し得る限りb)の形式をもつものである。この種の木造建築は全国的にも学校、庁舎などを中心に類例が見出され³⁸⁾、このような外観意匠は多少なりとも造形的意欲を発揮し得るものとして、地方の建築技術者層に採用されていたものと推測される³⁹⁾。

4-3 鉄筋コンクリート造の作品

鉄筋コンクリート造のものには鎮国守国神社楽翁公百年祭記念宝物館(No.8, 昭和9年竣工)、四郷尋常高等小学校講堂(No.9, 昭和10年竣工)、千種尋常高等小学校講堂(No.13, 昭和12年竣工)などがある。楽翁公百年祭記念宝物館(図-5)は寄棟造2階建て正面に切妻破風を載せ玄関ポーチを張出し、外観意匠に後の改造は認められない。外壁は下階では目地を切って石造を模すが上階では長押、柱型を張出している。これは住宅及び社務所、教会を除けば唯一の和風意匠による作品であり、いわゆる帝冠様式に通じる傾向を見せている⁴⁰⁾。

四郷尋常高等小学校講堂(図-6, 7, 8)はほぼ改造のない状態で維持されていたが昭和61年に解体された⁴¹⁾。平面は変形の六角形平面の広間部分の前後にそれぞれ矩形平面の玄関部分と舞台部分を繋げ、全体としてはほぼ左右対称となる。広間部分(平屋建)及び玄関部分(2階建)は鉄筋コンクリート造の外壁を一体に廻し、屋根は広間部分を鉄骨トラス組による寄棟造、玄関部分を木造トラス組による切妻造とする。一方、舞台部分は木造で屋根は木造和小屋組による切妻造とする。このように構造は全体として極めて折衷的である。外観では玄関部分正面に半円形平面のバルコニーを突出させ、トスカナ式円柱で支える。様式的モチーフはこの円柱のみで、外壁は玄関及び広間部分では縦長窓を上下2段に配し、窓廻

りにスパンドレルと額縁状の彫出しでアクセントを付けるのみの単純で明快な構成になっている。一方舞台部分は大壁下見板張とし、妻壁は多度尋常高等小学校(No.6)と同系のスティックスタイル風の表現とする。この講堂の竣工を伝える新聞記事は設計者には触れず、「是れが工事請負者は四日市市住吉町野田新作氏である。」と記す⁴²⁾。しかし、その全体構成や細部意匠は、野田の設計による事が明らかな次の千種尋常高等小学校講堂(No.13)との共通性が高く、特に矩計は酷似している。また、その設計を担当した旧所員の証言も得られる事から⁴³⁾、その設計は野田によるものとして差し支えないと考えられる。

千種尋常高等小学校講堂(No.13, 図-9)は四郷尋常高等小学校講堂に引続いて実施されたものである⁴⁴⁾。屋根葺材、窓・戸口のサッシュ、取付廊下の変更の他は改造は認められない。ここでは変形の六角形平面の広間部分の正面に舞台部分、側面に玄関部分を繋げ玄関部分中央には矩形平面のバルコニーを突出させる。広間部分(平屋建)及び玄関部分(2階建)は鉄筋コンクリート造、舞台部分(平屋建)は木造とし、屋根は広間部分を寄棟造、玄関及び舞台部分を切妻造とする。その基本的構成は四郷尋常高等小学校講堂(No.9)との共通性が高く、No.9が好評であった事を窺わせる。

楽翁公百年祭記念宝物館(No.8)と四郷・千種尋常高等小学校講堂(No.9, 13)とでは一見して造形的性格の差が大ききようであるが、a)勾配屋根と鉄筋コンクリート造壁面の対比を見せる、b)壁面は明快な直線的、平面的構成を持つ、c)正面に玄関ポーチ、破風などの装飾的要素を集中する、などの外観意匠の構成手法を共通にしている。これは先述した木造作品の外観意匠の構成手法とも通じるものがあり、また四郷、千種尋常高等小学校講堂(No.9, 13)では外壁、屋根構造に木造を併用し楽翁公百年祭記念宝物館(No.8)では和風意匠を指向するなど、野田による鉄筋コンクリート造の作品には木造建築との類縁性を認める事ができる。即ち、野田の鉄筋コンクリート造作品は鉄筋コンクリート造独自の形態を追求するというよりも、寧ろ従来の木造建築の外観意匠構成の延長上で、その壁体を鉄筋コンクリ

図-4 桑名第四尋常高等学校
(「写真集 三重百年」)

図-5 楽翁公百年祭記念宝物館

図-6 四郷尋常高等小学校講堂(下)と
四郷村役場(上)

図-7 四郷尋常高等小学校講堂実測断面図

図-8 四郷尋常高等小学校講堂実測平面図

ト造に置換したものと考えられる。しかし、一方で四郷、千種尋常高等小学校講堂 (No. 9, 13) は多角形平面を囲む単純な壁面と屋根面の構成によって一種の量塊的表現を達成している。三重県下では鉄筋コンクリート造の建築は大正末年頃から普及していくのであるが、以上のような木造との類縁性や量塊性を有する例は他に見られず⁴⁵⁾、ここに野田の鉄筋コンクリート造理解の独自性を見てよいであろう。

5. 建築技術者としての特質

5-1 技術、意匠の傾向と技術情報の摂取

野田の関わった建築の構造は昭和10年前後に若干の鉄筋コンクリート造、鉄骨造の建築例が見られる他はほぼ一貫して木造であり、また鉄筋コンクリート造のものも木造との類縁性が指摘できるものであった。更に野田の受けた建築教育も木工技能教育を主とするものと考えられ、野田は本質的に木造建築技術を基盤とする建築技術者と解される。しかし野田は鉄筋コンクリート造や鉄骨造も手懸け、また鉄筋コンクリート造の門柱などの開発、製造、販売を試みるなど新技術の摂取、応用も着実に進んでいる。

野田工務所の建築例のうち、四郷、大矢知、千種各尋常高等小学校講堂 (No. 9, 10, 13) は聴衆の視線を考慮してホールに多角形平面を採用したものであり⁴⁶⁾、No. 9は「耐震耐火に最善の注意を拂ひ」「通風採光にも相當の苦心を拂はれて居る事が窺はれ」と報じられ⁴⁷⁾、

図-9 千種尋常高等小学校講堂 (背面)

また、No. 13については先に触れたように野田は構造計算の簡素化、工事経費、施工の安全性などについて言及している⁴⁸⁾。このように野田の関わった建築には機能、構造、衛生、経済などについての合理的、実利的な配慮が窺われるものがある。以上の三事例の他は史料を欠くが、野田の建築例の大半は学校、工場施設などこの種の合理的、実利的配慮を一般に必要とする施設であり、こうした合理的、実利的な配慮は程度の差はあれ野田の建築設計における基本的傾向と見てよいであろう。

次に野田の建築例に見る外観意匠の構成は木造、鉄筋コンクリート造を通じて勾配屋根を架け、外壁面は平面的な幾何学的パターンに分節するものであり、わずかに玄関部分などに簡略化された様式的モチーフを用いるに留まる。また、細部意匠にも円形、三角形、矩形などの単純な幾何学的図形の組み合わせによる構成が多く用いられ、全体として装飾的要素の少ない簡潔な意匠を特色とする。

野田がどのようにして建築界の新しい動向に触れ、技術を摂取していったのか明確ではないが、野田は明治41年以降建築学会会員となっており、昭和5年から11年にかけて在籍が確認される所員6名中4名も同会員となっている。建築界の新動向に触れる機会に恵まれない地方在住の野田にとって「建築雑誌」が重要な情報源であった事は疑いない所であろう。また、富州原競馬場 (No. 11) の設計に当たっては甲子園球場を見学、参考とするなど⁴⁹⁾、先行する建築に範を求める事もあったようである。

5-2 野田工務所の経営

先述のように野田は大正13年頃に独立し、野田工務

所を開設して市井の建築に携わる。設計監理を主業務ないし業務の一部として自営する民間建築技術者は三重県内では野田を確認し得る最初の例として大正末年頃に成立を見るのであり、明治20年代以降に民間事務所が活動を始める東京及び大阪に比べ、その成立はかなりの遅れを見せている。三重県内の民間事務所の初期のものを挙げれば野田工務所(四日市市)のほか黒宮建築事務所(桑名町)、岸江建築工務所(津市)、堀崎工務所(宇治山田市)が知られる⁵⁰⁾。このうち黒宮建築事務所は大正3年早大卒業の黒宮五朗によるもので、黒宮は大学卒業後大阪で設計事務所に勤務し大正13年頃大阪に黒宮建築事務所を設立、同15年に桑名町に事務所を移転して主として桑名周辺の学校、庁舎建築を手懸けている。岸江建築工務所は三重県技手であった岸江九馬三が大正15年頃津市に設立したものであるが、比較的短期間で活動を終えたらしくその詳細は不明である。堀崎工務所は大正8年工学院卒業の堀崎秋生が内務省明治神宮造営局を経て大正15年頃帰郷し、家業の請負業を引続いだものであり、請負業的性格が強いが、堀崎の設計による一連の銀行施設や住宅などを手懸けている⁵¹⁾。

大正末年頃成立を見たこの種の自営民間建築技術者はその後昭和10年代中葉まで漸増していくが、特に設計監理を主業務とする場合その存立基盤は限定されており、一般には自宅の一室を事務所として零細な活動を行なう程度に留まっていたようである。こうした中で、野田工務所は不安定ながらも本格的な建築活動を継続し得た数少ない存在の一つであった。このような野田工務所は民間建築事務所としてどのような性格を持つものか以下に検討する。

野田工務所による建築は住宅のほか、庁舎、学校、工場などの地域に密着した公共的ないし実用的性格を持つものが多く、商業施設は殆ど見られない。その所在地は東洋スチール尼崎工場(No.14)、戦後の生川平作別邸(No.52)を除けばすべて三重県内に限られ、それも事務所所在地である四日市周辺が多い。また、それらの建築主はNo.14, 52を含めていずれも三重県内に基盤を持つ者である。こうした傾向はこれに伝承作品を加えるとしても変わらない⁵²⁾。このように野田工務所は所在地を中心とする比較的近距离の範囲で活動を行なう地方建築事務所の性格が強く、また野田自身も積極的に他地方での仕事を行なおうとはしていなかったようである⁵³⁾。

また、県内の仕事についても仕事獲得のための積極的な情報収集や営業活動は行なっていなかったようである。これは当時、自営建築技術者が少数に留まって同業者間の競争に乏しいという事情にもよろうが、一方、野田工務所の手懸けた建築には建築主相互の間に何らかの地縁的、人脈的繋がりを見出せる場合や同一建築主からの継続的な仕事が多いという事によるものであろう。こ

うした傾向は戦後についても指摘でき、これら建築主の中核的存在としては平田製網を経営する地域有力者である平田家が挙げられる。また、野田はかつて在職していた三重県の建築技術者からも折に触れて設計依頼の仲介を受けていたようである⁵⁴⁾。野田工務所はこのような地縁と人脈によって仕事を獲得し、一つの仕事が次の仕事に結びつくような好連鎖を設立後比較的早くから得ていたと考えられる。もちろん、このような連鎖が可能となるについては、建築主や地域における野田工務所の作品や建築活動に対する一定の信用が前提とならねばならない。次にそれを検討する。

二、三の回顧や新聞記事では野田工務所による建築について次のように触れている。まず多度尋常高等小学校(No.6)については「設計は四日市市の野田工務店野田技師の設計は少しゴツイが頑丈一点張で理想の設計だと得意がって居られた」⁵⁵⁾。四郷尋常高等小学校講堂(No.9)については先に触れた新聞記事に「而して講堂の様式は耐震耐火に最善の注意を拂ひ(中略)且つ収容力に遺憾なきを期すべく本縣に於ける最初の建築である六角式の鉄骨コンクリートである。(中略)是れが工事請負者は四日市住吉町野田新作氏である。(中略)尚ほ講堂の施設は階上を会議室とし階下には玄関控室等を設け(中略)又通風採光にも相當の苦心を拂はれて居る事が窺はれ畢竟東海に誇る理想的の大講堂である。」⁵⁶⁾。戦後の作品ではあるが暁学園小学校(No.36)については「暁学園が最も私立学園らしい学園であったのはこの時期だったろう。(中略)あの伊勢湾台風の時、一階すべてが水没してもびくともしなかった野田工務店施工の小学校校舎が、その第一歩だった。」と述べられている⁵⁷⁾。

これらを通じて窺えるのは野田の関与する建築が堅実な仕事となされて堅固であり、機能的にも十分な配慮がなされているという評価である。それは旧所員、施工担当者による野田の設計図書類の表現の緻密さ、現場監理の厳格さの指摘や、「野田はかねて三重の風土への配慮を強調し、軒出が深く勾配の急な屋根を多用していた」⁵⁸⁾との証言とも符合するものであろう。また現存作品もこれらの評価と矛盾するものではない。更に四郷尋常高等小学校講堂(No.9)は、昭和9年9月21日の暴風雨による学校校舎多数の倒壊事故を受けて同年三重県により制定された「耐震耐風建築構造規定」の最初の適用を受けるものとして報道されるなど⁵⁹⁾、野田工務所の建築は地方にあつては信頼できる構造技術と厳格な現場監理、施工に裏付けられた堅固なものとして、現実的な配慮の行き届いたものとして受け取られたものと考えられる。野田工務所が三重県下としては早期に継続的な事務所活動を維持し得たのはこのような理由に基づくのであろう。

一方、野田工務所はその最盛期において一定の仕事量を確保していたにも関わらず、その経営は所員の給与の支払にも窮するほど不安定な側面を持っている。その経営の困難さが何に起因するものか、野田工務所の経営に即して明らかにする事はできない。こうした建築事務所の経営の困難さについては既に当時一般的な状況として指摘されているのであるが⁶⁰⁾、地方に基盤を置く野田工務所の場合、都市部の事務所とは異なる問題が介在する事も考えられる。こうした地方事務所の経営の問題については今後の課題としたい。

結 び

以上、本稿では野田の建築活動をよりどころとして大正・昭和戦前期の地方における建築技術・意匠の定着、展開の過程を考察してきた。それを次のように要約して結びとする。大正・昭和戦前期の三重県においては学校、庁舎などの公共施設や工場施設など、地域の基盤的諸施設の整備の役割は、主として工業学校において建築教育を受けた中堅技術者層が担っていた。こうした中堅技術者は三重県、各市、神宮司庁、造神宮使庁、大手紡績会社などに属する営繕技術者として活動を行なうのが通例であるが、こうした組織に属する建築技術者の中から自営して設計監理を行なう者が大正末期頃には出現する。大正13年頃に野田工務所を設立した野田新作はその最初期の例である。これ以降、昭和戦前期を通じて小規模な設計事務所が漸増するが戦時下に活動を休止し、戦後は昭和20年代中葉に学校建設や建築基準法、建築士法施行を契機に成立した新興の設計事務所が台頭する。

野田新作は明治30年代に工業学校において建築教育を受け、四日市市、陸軍、三重県、東洋紡績を経て大正13年頃に野田工務所を開設しており、その建築活動は昭和30年代にまで及ぶ。その経歴は実業学校令に基づく工業学校の最初期の卒業生であり、三重県内の主要営繕組織を経験し、三重県下で最初期の設計事務所を開設した点において注目に値する。野田の作品は学校、役場庁舎、工場施設、住宅など地域に密着した実用的建築が殆どであり数例を除いては全て木造である。その外部意匠は窓枠や柱型などの水平、垂直の要素によって壁面を分節する手法を多用するものであるが全国的にも共通する傾向の作例は多く、この種の建築がいわば中堅技術者層による地方向け中級建築として広い基盤に立脚している事が窺われる。

野田工務所の仕事圏、建築主はほぼ事務所所在地を中心とした三重県内に限られ、仕事は地縁的、人脈的な繋がりによって獲得されている。その経営的基盤は不安定であるが、継続的な事務所活動を維持し得たのはその建築の堅固さ、現実的配慮が評価されての事と考えられる。野田は定着して建築活動を行なう中で、新しい建築の動向、技術、意匠などを摂取し、地域の実状に則した形で

定着させる役割を果たした。これは野田に限らず、より広範な地方建築技術者の存在意義に通じると思われ、今後他の建築技術者の建築活動を検証する中で更に検討を加えていきたい。

謝 辞

本研究に当たっては我妻正俊、貝沼 孝、小林信治、辻 義教、野田泰正、花見安市、堀崎秋生の各氏に貴重な御教示をいただきました。また調査・資料収集に当たっては各建物関係者ならびに関係機関に多大のご配慮をいただきました。ここに記して謝意を表します。

注

- 1) 野田工務所の所員として昭和6年から同16年の間設計に関与した我妻正俊氏、野田工務店の工事責任者として昭和24年から同38年の間工事施工を担当した小林信治氏による。
- 2) 戦前の三重県に定着して活動を継続した大学出身技術者は明治36年から41年にかけて三重県技師として活動した佐藤功一（明治36年東京帝大卒）、大正15年以降桑名で設計事務所を営んだ黒宮五朗（大正3年早大卒）の例を挙げるに留まる（各年度の『建築学会会員住所姓名録』による）。
- 3) 貝沼 孝策戸籍抄本
- 4) 山形県立工業学校については山形県教育委員会『山形県教育史資料』各巻
- 5) 山形県立米沢工業高等学校鶴城工親会『会員名簿』（昭和57年）、p.126
- 6) 注4）参照
- 7) 清水慶一『明治期における初等・中等建築教育の史的研究』（昭和57年）、p.49
- 8) 米沢工業高等学校所蔵職員履歴書
- 9) 三重県辞職に至る野田の経歴については四日市市所蔵履歴書（明治40年山形県立工業学校卒業より大正元年四日市市依頼退職まで）、三重県史編さん室所蔵履歴書（明治40年山形県立工業学校卒業より大正3年陸軍省依願免本官まで）、同室所蔵履歴書（明治40年山形県立工業学校卒業より大正7年月俸参拾参円給与まで）の3種の履歴書があり、これら相互の内容の矛盾はない。三重県辞職までの野田の経歴はこれらの履歴書による。
- 10) 貝沼 孝氏（野田新作甥）による。
- 11) 東海地方における建築教育機関の創立は名古屋高等工業学校（明治38）が早く、工業学校段階では津市立工芸学校（大正6）、名古屋工科学院（大正9）、名古屋市立工芸学校（大正11）、浜松工業学校（大正13）と大正期となる。
- 12) 野田泰正氏（野田新作孫）、辻 義教氏（同）による。
- 13) 四日市市教育研究所『四日市教育百年史』（四日市市教育委員会、昭和57年）pp.205-221
- 14) 貝沼 孝氏所蔵
- 15) 『東洋紡績株式会社職員名簿』、野田を確認できるものとして大正8年12月1日発行、大正9年12月1日発行の2種が東洋紡績本社に現存する。
- 16) 『東洋紡績70年史』（昭和28年）pp.165-178、東洋紡績富田工場所蔵「富田工場記録」
- 17) 「役場廳舎新築設計書」（四日市市所蔵）の内訳書に「野田用箋」と印刷されている。また小林信治氏によれば野

- 田は同建物望楼の螺旋階段の納まりに苦労したと語っていたという。
- 18) 四日市市四郷郷土資料館（旧四郷村役場）所蔵「四郷村役場棟札」
 - 19) 各年度の『建築学会会員住所姓名録』による。
 - 20) 松阪市郷土資料室所蔵「大正十三年度三重縣飯南郡松阪町歳入出予算」（『松阪町議会記録』）
 - 21) 野田は明治41年以降建築学会会員である。注19) 参照
 - 22) 『四日市市史』（四日市市，昭和36年）p.97
 - 23) 岡田 光（名高工昭和5卒），永井義徳（島根工業昭和6卒），我妻正俊（山形工業昭和7卒），小笹典紀（島根工業昭和8卒），曾田安市（島根工業昭和8卒），田村三朗（名高工昭和11卒）が知られ，小笹と曾田を除く4名は建築学会にも加入している。曾田は昭和9，他は卒業時に入所している。注19) および花見（曾田）氏による。
 - 24) 我妻正俊氏による。
 - 25) 以上野田工務所については旧所員の我妻正俊，花見（曾田）安市両氏から教示を得た。所名の変更は『建築学会会員住所姓名録』で確認できる。
 - 26) 菰野町郷土資料館所蔵「千種小学校講堂建築二関スル雑書綴」なお野田は本名である「新作」の他に通称として「尚孝」も使用しており（小林信治氏，辻 義教氏による）第一・三信は尚孝，第二信は新作の名によっている。
 - 27) 実際には地元業者が施工している。
 - 28) 我妻正俊氏が現場に常駐していた。
 - 29) 三重建築協会機関誌「建築」9号（昭和26年4月）p.6，なお野田は無考査合格であり，三重県下での無考査合格者は123名であった。
 - 30) 小林信治氏による。
 - 31) 松阪市秘書課所蔵「市庁舎のうつりかわり」（写真帖）
 - 32) 松阪市所蔵「松阪町役場棟札」
 - 33) 中西昌二「白粉町について」（『駅鈴』第10号，昭和60年8月）
 - 34) 東谷仁助の弟子松田儀三郎氏による。
 - 35) 日本建築学会『日本近代建築総覧』（技報堂出版，昭和55年），三重県教育委員会「三重県近代建築所在確認アンケート調査」（未公開，昭和59年），筆者による所在確認調査および各市町村史，写真帳類による。
 - 36) 桑名市立城東小学校『創立100周年記念』（昭和48年）
 - 37) 『日本近代建築総覧』，「三重県近代建築所在確認アンケート調査」，筆者による所在確認調査（注35）参照）で判明した三重県内の現存木造公共施設（学校，庁舎，郵便局舎，兵舎）中，a）3例，b）15例，c）17例，d）3例，計38例を得た。
 - 38) 埼玉県教育委員会『埼玉県大正建造物緊急調査報告書』（昭和60年），北海道建築士会『北海道の開拓と建築』（昭和62年）
 - 39) 一方，単純な下見板張大壁の手法はこれに対して大工棟梁層が採用する傾向があるが，大工棟梁層の建築活動には不詳の点も多く，更に検討したい。
 - 40) No.8には別に「守国公壹百年祭記念宝物館建築図」（鎮国守国神社蔵）があり，鉄筋コンクリート造平屋建寄棟造の簡素な外観意匠の別案も計画されていた。但し我妻正俊氏によればこの計画図は野田工務所によるものではない可能性がある。なお同神社事務所（野田工務所設計）についても類似する体裁の平面図が遺されており，これらについてはなお検討を要する。
 - 41) 解体に先立って筆者らによる記録保存調査が行なわれた。
 - 42) 四日市市立四郷小学校『四郷小学校百年』（昭和51）所収，紙名は不詳である。
 - 43) 注24）参照
 - 44) 菰野町郷土資料館に図面，設計数量書，見積書等関連資料がある。
 - 45) 注35）参照
 - 46) また音響の事は特に考えていないという（注24）参照）
 - 47) 注42）参照
 - 48) 注26）参照
 - 49) 注24）参照
 - 50) 注19）参照，非会員の建築技術者の存在には問題が残る。なお検討を要する。
 - 51) 日本建築学会東海支部三重支所『三重の建築 近代の歩み』（昭和62年）及び堀崎秋生氏による。
 - 52) 野田の設計によるものとして近親者や関係者に伝承されている戦前の建築には平田製網工場施設（四日市市），霞ヶ浦海水浴場遊楽園（四日市市），川原田村役場（四日市市），井田川村役場（亀山市），上野町議場（上野市），石薬師図書館（鈴鹿市），某劇場（尾鷲市）などがあり，いずれも三重県内に所在していた。
 - 53) 注24）参照，名古屋での仕事の依頼は同窓の巻坂亀四郎経営の設計事務所に紹介していたという。
 - 54) 注24）参照
 - 55) 伊藤淳次郎『議会の想い出』（昭和43年）pp.69-87
 - 56) 注42）参照
 - 57) 暁学園『暁学園30年』p.17
 - 58) 注24）参照
 - 59) 昭和9年11月10日付伊勢新聞
 - 60) 新名種夫「設計事務所は何処へ行く」（『建築と社会』昭和5年10月号）

SYNOPSIS

UDC : 72.03(52) : 69.007.2 : 69.008

ON THE ARCHITECTURAL ACTIVITIES OF REGIONAL ARCHITECTS AND ENGINEERS IN THE TAISHO AND SHOWA ERAS (1910s TO 1940s)

—A case study on the architectural activities of Noda Shinsaku in Mie Prefecture—

by YOICHI SUGAWARA, Assistant of Mie Univ., Member
of A.I.J.

The main subjects described in this article are as follows :

1. academic background of Noda Shinsaku
2. architectural activities of Noda Shinsaku as a middle-management architect-engineer, working for public offices and a private organization
3. architectural undertakings of Noda Shinsaku as an independent architect-engineer
4. architectural works by Noda Shinsaku
5. characteristic of Noda Shinsaku as an architect-engineer